

『海外での学会』雑感

教育学部 祐宗省三

このたび広報委員会から、「海外レポート」の一文を依頼された。ほとんど毎年、海外で開催される学会に出席しているので、なんでも書けそうに思えるのだが、いざとなると、なかなか筆が進まない。そこで思い切って肩のこらない随筆風のものでお許しをいただきたい。

何年か前の夏だったか、メキシコはアカプルコの国際会議場で「国際心理学会議」があったときのことである。トイレの場所を受付氏に尋ねたところ、「探せばわかるでしょう」ぐらいのぶっきらぼうな返事だった。そのときは、不親切極まると腹が立ったが、そのあと滞在中いろんな人から耳にしたことは、国際会議に出席するような人は、子どもではあるまいし、自分で便所ぐらいは探すのが常識だとのことだった。そういえばフランスはツールのラブレール大学での「国際行動発達会議」に出席したときも、便所を示す張り紙は見当たらなかったし、米国のロードアイランド州ニューポートでの「国際心理学会議」でも、そんなものはなかった。そのほか各地での学会でそんな張り紙を見たおぼえがない。日本ではどんな会議でも、廊下の曲がり角や、ときには受付付近に矢印付きの大きな標識が立っていたりする。よく考えてみれば、日本でのやり方は、思いやりだと言えなくもないが、「お世話かいだ。便所ぐらい探すわい」と言われるかも知れない。事実、みんな自分で探して用を足している。どうも日本では矢印人間をつくっているように思われてならない。

日本ではスライド係がいたりして、たしかに便利ではあるが、スムーズにいかない場合も少なくない。支払うアルバイト料もばかにならない。このところ日本でも学会のときワークショップが流行している。あちらのワークショップでは、だれか1人か2人リーダーがいて、何か新しい理論とか技法を講義し討議、実習するというのが一般的のようだが、日本では演者が何名かいて次々に自分の研究を発表し、シンポジウムとほとんど変わらない。だから日本のワークショップはいわば自主シンポジウムと言ってもよい。とくに欧米と日本ではシンポジウムは大層ちがっている。欧米のシンポジウムでは一般に、演者が自分のデータを発表することに重点が置かれている。日本ではいわば大所高所からというか、単に他者の研究の展望に終るだけのものが多く、時に公開座談会的になったりする。あちらではシンポジウムが終わると、特に若い人たちは演者の席に殺到して自己紹介し質問している。一般のペーパーセッションでもそういう光景が珍しくない。わが国では一般にだれかに紹介してもらわないと会話をしない。他者から話しかけられるとにっこりして話し出す。これは一種の甘えに他ならないと思うのだが、いかがなものだろうか。他者にたよらず自分のことは自分でやるという欧米流のやり方が、こんなところにも現れているような気がする。

受付（登録）もずいぶんちがっている。日本では会期中毎日だらだらとやっている。欧米では前日にすましておくのが多い。またかなりこみいった事柄でも受付氏が手際よくさ

ばいているが、本邦ではいちいち大会本部に回答をもらいに行っている。ポスターセッションだけは、日本と欧米は大体似ている。日曜日を会期に入れないのが欧米だが、日本はその逆で、日曜日や祝祭日を主要な会期としている。わが国では連続3時間のセッションが珍しくないが、欧米では必ずコーヒー・ブレイクが入る。これも1つには勤勉さ、またはがまん強さのちがいかもしれない。「アメリカ心理学会」などでは、若い参加者のために、赤ん坊預かり所が設けられていて好評である。収入や税金の程度に応じて料金も決められている。最近日本でもこのやり方を採用している学会があるが、これについてもっと研究して見習ったらどうだろうか。きっと喜ぶ人がいるにちがいない。

学会といえば大小さまざまなパーティーがつきものである。洋の東西南北でそのマナーはそれぞれちがっていて興味深い。酒をついでもらうとき、日本ではグラスや盃を持つのがマナーだが、欧米ではハンズ・バックつまり手を出さないのが上品なマナーとなっている。そんなたぐいのことを挙げればきりが無いが、気になることの1つに乾杯と万歳がある。日本ではだれかの音頭で乾杯をしないとお酒を飲んでほならないことになっている。あちら流に、乾杯も、また最後の万歳もなしにして、集まった者から勝手に飲んだり食ったりしたらどうだろうか。大きなパンケットは別だが、挨拶は少し時間がたった時点で、手短かにやったらどうだろうか。ただし誰かがステージで話しているときは、黙ってできるだけ聞くようにしてもらいたい。これは当たり前のことだが、どうも日本のパーティーで

は、ほとんどの人はスピーチを聞いていない。ざわめいていて、誰も聞いていないのに、がまん強く話している光景はこっけいである。もうひとつつけ加えるが、日本の女性の多くは下腹部近くにバッジ（名札）をつけているが、見る人のことを考えて、欧米風に上品に、胸につけてもらいたい。下につけることが決して控え目にはならない。日本では、とくに若い人たちの間で、発表して質問がないとホッとしているようであるが、海外ではどうも逆のように思われる。自分の発表に対して多くの質問があれば喜んでいる。質問がないということは、どうも自分の発表はつまらなくて、無視されているように思っているようだ。

こう書き連ねてくるとなんだか海外での学会がよく見えて、本邦での学会はすべてくだらないように思われるが、決してそうとばかりいえぬ。ひとつふたつあげてみよう。あちら、とくに米国の学会などでは、読みたくない配布資料を机や椅子にちらかして退出する者が少なくない。読みたくなくても一応ホテルまでは持ち帰ったかどうか、それが礼儀というものではないか、といつか知人に言ったところ、「遅かれ早かれ捨てるのだから同じことだ」と言い切った。そこらあたりは国民性のちがいだろうか。演者の発表がまだ終ってないのに、途中でさっさと退室する人がいる。これなども日本では一般に見られない光景である。

<参考文献>

祐宗省三 1986 「欧米での学会素描」『教育相談研究』42, 1。